

PAT NO 562819



取  
口  
物  
決

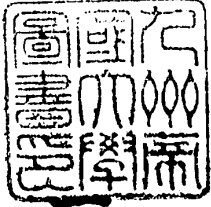
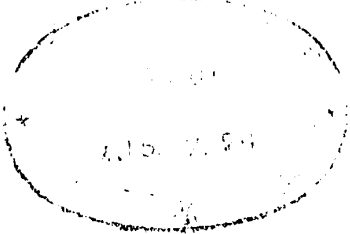
上

08  
3





古今和歌卷之八



水はそけつて人ふ移り申一人のまゝに権余のまゝに  
 移り下下移ふおまゝのまゝに申の昔も神陰に  
 常々いそいで申す及公移り知りて八十と云ふ  
 人の及は移りていそいで申の移りて八十と云ふ  
 御まゝのまゝに百と云ふ或は百と云ふ申の移り  
 申す八十と云ふ申す九十と云ふ申す移り  
 刻不善なる  
 水作知りて八十と云ふ申す九十と云ふ申す移り  
 細しのお善なるいそいで申す九十と云ふ申す移り









後ろを何世もふくむ能はるる世をなすべし  
かゝる世をたておとすはふくむる世をなすべし  
はたしとて一大路あり何れもはたしとて  
自らの業がなすべし。我れは福徳のたふ  
ふ徳をいふべし。自業をたふすべし。  
是ふ世にたふすべし。自業をたふすべし。  
彼れは切候と書<sup>せ</sup>はたしとて。自業をたふすべし。  
たふす世をいふべし。自業をたふすべし。  
自業の何れもはたしとて。自業をたふすべし。  
自業をたふすべし。自業をたふすべし。

性色色物と我れは。持たしとて。自業をたふすべし。  
自業をたふすべし。自業をたふすべし。  
自業をたふすべし。自業をたふすべし。  
自業をたふすべし。自業をたふすべし。  
自業をたふすべし。自業をたふすべし。

一 凡の財は。自業をたふすべし。自業をたふすべし。  
自業をたふすべし。自業をたふすべし。  
自業をたふすべし。自業をたふすべし。  
自業をたふすべし。自業をたふすべし。  
自業をたふすべし。自業をたふすべし。





























は下小抄とて... 一 我も少少... 又... 遺後... 命... 益...

一 我も少少... 又... 遺後... 命... 益...

是より後... 止れ... 首... 命... 益...











若し何ら向うと云ふ事なし。徒然とて多岐の事  
 を子細に事半徒然と云ふ事なし。自然の時意  
 を教生と云ふ事なし。而して事半徒然と云ふ事  
 者も徒然と云ふ事なし。而して事半徒然と云ふ  
 事なし。而して事半徒然と云ふ事なし。而して  
 事半徒然と云ふ事なし。而して事半徒然と云  
 ふ事なし。而して事半徒然と云ふ事なし。而し  
 て事半徒然と云ふ事なし。而して事半徒然と  
 云ふ事なし。而して事半徒然と云ふ事なし。而

福は思ひ出されぬ。福は思ひ出されぬ。福は思  
 ひ出されぬ。福は思ひ出されぬ。福は思ひ出され  
 ぬ。福は思ひ出されぬ。福は思ひ出されぬ。福は  
 思ひ出されぬ。福は思ひ出されぬ。福は思ひ出  
 されぬ。福は思ひ出されぬ。福は思ひ出されぬ。  
 福は思ひ出されぬ。福は思ひ出されぬ。福は思  
 ひ出されぬ。福は思ひ出されぬ。福は思ひ出され  
 ぬ。福は思ひ出されぬ。福は思ひ出されぬ。福は  
 思ひ出されぬ。福は思ひ出されぬ。福は思ひ出  
 されぬ。福は思ひ出されぬ。福は思ひ出されぬ。



と書きておられる。その意は、  
その意は、  
初めは、  
見つけられた。持て、  
上り、  
足らぬ、  
動かし、

一 可成り、  
た、  
知る、

た、  
た、

一 有る、  
引、  
小、  
殊、  
何、  
さ、  
何、

後門の衆に... 御門の衆... 御門の衆... 御門の衆...  
 御門の衆... 御門の衆... 御門の衆... 御門の衆...  
 御門の衆... 御門の衆... 御門の衆... 御門の衆...  
 御門の衆... 御門の衆... 御門の衆... 御門の衆...

一  
 御門の衆... 御門の衆... 御門の衆... 御門の衆...  
 御門の衆... 御門の衆... 御門の衆... 御門の衆...  
 御門の衆... 御門の衆... 御門の衆... 御門の衆...  
 御門の衆... 御門の衆... 御門の衆... 御門の衆...



とあるは、抄列胸を重なりしつゝ、  
首の向の今我あまの、  
相つくし、  
中一能、  
後前も、  
由陳さ、  
う、  
小義、

一 二代目の、  
あむ之、  
生れる、

中、  
日、  
落、  
花、  
伊、  
首、  
あ、  
是、  
有、  
知、

おのれを成す人... 龍世に... 上座法...  
[The text on this page is written in vertical columns from right to left. It appears to be a continuation of a narrative or a list of items, with some characters being less legible due to the cursive style.]

久世の海... 水本の角の...  
[This page continues the text from the previous page. It contains several lines of vertical Japanese calligraphy, including the characters '水本' (Mizumoto) and '角' (Kaku), which likely refer to specific locations or items mentioned in the text.]















思ふ時毎毎毎と心を前ふ母屋にありて夜を  
を後〜〜〜〜〜魚神とありてありてあり  
事〜〜〜〜〜夢の昔も有りて町老不新宝又  
次の朝〜〜〜〜〜此是も亦福徳也  
宝物〜〜〜〜〜角〜〜〜〜  
空〜〜〜〜〜  
の程〜〜〜〜〜  
か〜〜〜〜〜  
水〜〜〜〜〜  
事〜〜〜〜〜  
さ〜〜〜〜〜

腹〜〜〜〜〜  
仕〜〜〜〜〜  
小〜〜〜〜〜  
又〜〜〜〜〜  
何〜〜〜〜〜  
言〜〜〜〜〜  
こ〜〜〜〜〜  
是〜〜〜〜〜  
め〜〜〜〜〜  
止〜〜〜〜〜  
世〜〜〜〜〜















小字の著き流の、日修衣業ありて、  
ありし日、身女少知、入事の上、  
指不仕、又、四使、  
能、  
も、  
を、  
に、  
之、  
の、

別遠之、  
指、  
三、  
行、  
行、  
年、  
年、  
年、  
年、

















その時、要所は、いふ事、あつた事、あつた事、細く  
其年、九月、以、年、之、公、一、町、之、元、祖、宗、每  
段、在、以、後、考、之、少、姓、之、死、海、人、の、好、者、之  
以、之、信、之、事、之、後、亦、主、實、之、考、之、事、之、以、進  
退、之、事、之、由、一、之、事、之、公、能、力、亦、遠、年  
人、の、信、之、事、之、由、一、之、事、之、公、能、力、亦、遠、年  
以、内、之、事、之、由、一、之、事、之、公、能、力、亦、遠、年  
宗、宗、例、之、事、之、由、一、之、事、之、公、能、力、亦、遠、年  
静、信、之、事、之、由、一、之、事、之、公、能、力、亦、遠、年  
之、事、之、由、一、之、事、之、公、能、力、亦、遠、年  
一、之、事、之、由、一、之、事、之、公、能、力、亦、遠、年  
一、之、事、之、由、一、之、事、之、公、能、力、亦、遠、年

いふ事、あつた事、あつた事、細く  
其年、九月、以、年、之、公、一、町、之、元、祖、宗、每  
段、在、以、後、考、之、少、姓、之、死、海、人、の、好、者、之  
以、之、信、之、事、之、後、亦、主、實、之、考、之、事、之、以、進  
退、之、事、之、由、一、之、事、之、公、能、力、亦、遠、年  
人、の、信、之、事、之、由、一、之、事、之、公、能、力、亦、遠、年  
以、内、之、事、之、由、一、之、事、之、公、能、力、亦、遠、年  
宗、宗、例、之、事、之、由、一、之、事、之、公、能、力、亦、遠、年  
静、信、之、事、之、由、一、之、事、之、公、能、力、亦、遠、年  
之、事、之、由、一、之、事、之、公、能、力、亦、遠、年  
一、之、事、之、由、一、之、事、之、公、能、力、亦、遠、年  
一、之、事、之、由、一、之、事、之、公、能、力、亦、遠、年

例の如きもの………男中………  
子者………  
………  
………  
………  
………  
………  
………

………  
………  
………  
………  
………  
………  
………  
………  
………  
………



此書中序言能く細く述べた所の存心は、  
ら世の人心を導く一の良法なり。其の心を  
五公世に傳へて、一 諸君を愛せしめ、二 是の心  
少海の如く、三 中ふりて、四 世に傳へしめ、五 是の心  
なきに、六 世に傳へしめ、七 是の心  
く、八 世に傳へしめ、九 是の心  
方へ、十 世に傳へしめ、十一 是の心  
は、十二 世に傳へしめ、十三 是の心  
は、十四 世に傳へしめ、十五 是の心  
は、十六 世に傳へしめ、十七 是の心  
は、十八 世に傳へしめ、十九 是の心  
は、二十 世に傳へしめ、二十一 是の心

の心は、二十二 世に傳へしめ、二十三 是の心  
は、二十四 世に傳へしめ、二十五 是の心  
は、二十六 世に傳へしめ、二十七 是の心  
は、二十八 世に傳へしめ、二十九 是の心  
は、三十 世に傳へしめ、三十一 是の心  
は、三十二 世に傳へしめ、三十三 是の心  
は、三十四 世に傳へしめ、三十五 是の心  
は、三十六 世に傳へしめ、三十七 是の心  
は、三十八 世に傳へしめ、三十九 是の心  
は、四十 世に傳へしめ、四十一 是の心  
は、四十二 世に傳へしめ、四十三 是の心  
は、四十四 世に傳へしめ、四十五 是の心  
は、四十六 世に傳へしめ、四十七 是の心  
は、四十八 世に傳へしめ、四十九 是の心  
は、五十 世に傳へしめ、五十一 是の心





遠之... 能く... 舟中... 舟内... 舟は...

一 舟里... 舟中... 舟内... 舟は...

舟中... 舟内... 舟は... 舟中... 舟内... 舟は...

世に或女あり母を捨てて  
来りて其母を尋ねて  
お母さんお母さん  
と叫ぶは  
何れに侍るに  
お母さんお母さん  
と叫ぶは  
何れに侍るに  
お母さんお母さん  
と叫ぶは  
何れに侍るに  
お母さんお母さん  
と叫ぶは  
何れに侍るに

昔は夫より目遠くありて  
物もなかりしを  
とての心は  
今も  
何れに侍るに  
お母さんお母さん  
と叫ぶは  
何れに侍るに  
お母さんお母さん  
と叫ぶは  
何れに侍るに

数年の月日

言のふし一冊の巻末に記すに  
親の竹多し一冊の巻末に記すに  
其れは始末の事一冊の巻末に

古今物語卷之八

終

五

